

第7次山形県教育振興計画検討委員会（第7回） 発言概要

（第7次山形県教育振興計画検討委員会 委員名簿順）

【池田委員】

- 6教振策定のプロセスと様変わりした。7教振では、目指すべきものが何か、ゼロから構築しているので、有意義な議論ができています。
- ワクワク無限大、「なんで？」を大切に、といったような、これまでの計画にはない、見ていてやってみたいと思うキーワードが並んでいてよい。
- アクション3 - 5(4)いじめへの対応等、生徒指導の充実について。スクールカウンセラー等の外部専門家とのチームを構成するとあるが、これは誰を救うためのものか。いじめられた側を救うのはもちろんだが、いじめた側も抱えている心の問題があるから発生するもの。双方向のフォローをお願いします。
- アクション3 - 6健やかな体の育成について。(2)の2点目に、あえて「運動部活動」を入れなくてもよい。文化活動の中でも心身の健康増進は必要。学校の活動の中で心身の健康を増進していくということではないか。
- アクション4 - 9様々な事情を持つ子どもへの対応について。小規模校の校長と話した際、今後子どもは減少するが、学校をなくすのではなく、この学校なら行ってみたい、今までと違う選択をしたいという子どもたちを受けられる学校でありたいという話を聞いた。これから学校の在り方を考えるうえで、様々な選択肢があることを念頭に置いた教育をしてもらいたい。
- アクション4 - 9(1)の5点目に不登校支援ハンドブックの記載があるが、ハンドブックの効果をどう捉えているか。作って終わりではなく、活用されて、誰かの行動が変わって改善につながる事が大事。活用方法やゴールまでフォローを。
- ワクワクにも探究にもお金はかかる。今までの予算で十分な取組みだったのか見直しはできているか。計画には書いてあるのに、学校にはお金がないのでできませんとなってはならない。子ども、教育にお金をかける覚悟を持ってもらいたい。

【石沢委員】

- 素案になって全体が真面目になった印象。県民の皆さん、子どもたち、先生たちへの伝え方を整理する必要がある。新しい部分、チャレンジの部分などが分かりやすく伝わる表記など、何かしらの工夫が必要。
- 今回の計画は、子どもたちが地域と関わる事が核。アクション1 - 1(2)探究学習の拡大について。県内の小中校では、この数年で様々な実践活動が行われてきた。ただ、学校の中で発表して終わりではなく、もう一步先につなげてほしい。例えば、地域の中で何かしらの形にするなど、学習の機会がどんどんつながる形になると、子どもたちの学びの自信になる。
- 子どもたちが地域に出れば、学校の中だけでは起こらないトラブルや話し

合いが必要な場面が増えるだろう。子どもたち自身のファシリテーション力や丁寧な話し合いの場の作り方など、対話をする力や考え方が必要。

- アクション3 - 5 豊かな心の育成について。これからは、体だけではなく心、例えば自分自身を大切にするセルフケア、ジェンダー、性教育、女性自身が自分の体をどう捉えるかといった自己認識などの学習が重要になるので、そうした項目があるとよい。
- アクション5 - 10 (1) 働きながら生涯学べる環境の整備について。体験を通して多世代が学び合う機会の創出など、県民の視点で、社会人も子どもから学ぶというような文言があるとよい。
- アクション5 - 10 (2) 文化芸術の振興について。伝承活動、民族芸能だけでは幅が狭い。文化芸術は、音楽、生活、文化、食、文芸、文学と幅広く、自分の表現をすることで、誰かとつながるきっかけとなり、生きることと直結するもの。もっとジャンルの幅を広めて記載してほしい。
- 指標について、今までのようにデータで見る部分も必要だが、子どもたちがどう考え感じていたか主観的な部分も具体化できないか。例えば、失敗しても、その失敗を踏まえてまたチャレンジできたことが反映されるような評価軸など。データの側面と両方の軸から振り返りができるとよい。

【佐藤委員】

- 概要版1枚目の「目指す社会」の部分だけ硬い印象。「7教振が目指すこれからの山形」など、目標や県民へのメッセージのように柔らかい記載にしてはどうか。
- アクション4 - 9 (1) 不登校対策と不登校児童生徒への対応について。ICTの活用による支援は大事なことだが、子どもたちが学校に通うという体験も必要。児童生徒の状況に応じ、自宅からの外出が難しい子にはICT、外には出られるが学校に行けない子にはフリースクール等の民間団体と連携した支援を。
- 市町村の教育支援センターは、それぞれ充実度合が異なる。理科実験室、体育館、畑など、様々な体験ができるリソースがある市町村もあるが、おそらく全市町村がそういう状況ではない。教育支援センターにおける教育活動の充実や相談員の人件費等に対する財政支援について、計画には書かないまでも検討いただきたい。
- 評価指標について2点。1つは確かな学力の育成の評価指標には学力測定のため統一の試験を実施する必要があるが、これをどう確保するのかという点。もう1点は、個別最適な学びが実現されているとすれば、分布の山全体が高得点側に移動するため、単に平均点ということだけではなく、分布全体が高得点に移行していることが示されるような多様な指標を用いて評価できると良い。
- 不登校児童生徒に対する施策に関する成果指標について。不登校児童生徒

の割合を真っ先に思い浮かべるが、本県は、全国的には不登校児童生徒が少ない県。高校進学率、さらには3年後、5年後の高校卒業率など、数年後に子どもたちが生き生きとしているのかといった横断的な視点も必要。児童生徒の状況を追うことは難しいかもしれないが文科省の調査なども参考に検討いただきたい。

【澤邊委員】

- 概要版2枚目の下段、教育DX、教育環境について、前回から修正して「チャレンジを支えるもの」としたことはよい。
- アクション4-8にインクルーシブ教育を強く入れていただいた。インクルーシブ教育の定義については議論があるが、子どもたちの様々な特徴によって学びの場を変えずに、それぞれの子どもたちに寄り添うことと考えており、日本が勧告を受けた国連の考え方もそうだと思っている。一足飛びでなくてもよい。少しずつでもいい、でも明らかにその方向に進んでいくことを引き続き入れてもらいたい。
- インクルーシブ教育については、今のところ障がいの有無でしか見ていないが、アクション4-9様々な事情を持つ子どもへの対応にもつながるもの。外国籍の子どもなど、一緒に学ぶためには支援が必要だが、学校でいろんな人たちと触れ合いながら学んでいけるという方向性が示されることが大事。
- アクション4-9(2)家庭の事情等により学業に影響が生じている子どもへの対応について。ヤングケアラーや子どもの貧困など、特に家庭の事情で厳しい状況に置かれている子どもたちが以前よりも見えづらくなっている。掘り起こしという言葉は適切ではないが、なかなか見えない子どもたちに気づく目配りが大事。

【末永委員】

- 計画策定のプロセスが素晴らしい。「県民みんなで」というキーワードや「対話」という言葉が出ている中、様々な地域で多くの方々と対話しながら計画をまとめてきたプロセス自体が教育計画としてオンリーワンだろう。
- 県民の皆さんに計画を自分事にしてもらいながら各地域で前向きな議論をしてもらうことが、計画策定やパブリックコメントを行う目的の一つと考えられると、計画案をオンラインで公開して意見聴取するパブリックコメントのやり方にもう一工夫、二工夫入れたプロセスにすると「県民みんなで」というコンセプトに合う計画になるのではないかと。
- 教育行政の枠の中にとどまることなく、様々な主体を巻き込まないと実現できない内容を多く含んでいる。関係者に限らず、多くの方々の議論を呼び起こすようなパブリックコメントの手法や計画をどう浸透させるかは課題。市民ベースでの対話イベントが様々行われているが、そういう場で、計画を叩きに自分たちは何ができるかといった前向きな議論が起こって、パブコメに反

映されていくとなおよいだろう。

【高井委員】

- 地域、企業を意識し、県全体で子どもを育てていくということが読み取れる素案になった。
- アクション3-5(2)について。郷土愛というと自然、食、歴史などを思い浮かべるが、産業などもある。また、魅力だけでなく、ウィークポイントや課題にも触れる機会が必要。企業がSWOT分析を行うように、どういう点に目を向けると将来的に良くなるかということまで考えられるとよい。
- 山形AI部が、企業に対してAIを活用してよりよい会社にするための提案を行う活動をしていることや、村山産業高校が、農業の課題に対しIoTを活用した解決策を生み出しながら地域とつながっている事例などをうまく展開できるとよい。
- 生成AIが急激に大衆化し、人間が情報処理・判断を頑張らずともよくなってきた中で、子どもに限らず人の育成に必要なのは、まずは自分自身の体で、あとやることは感性の捉え方と表現の仕方などの部分。アクション5-10(2)文化芸術の振興については、もっと広い捉え方をして、文化芸術、インプット、アウトプットできることが今後重要。
- 長い計画なので、継続的にトリガーやフックを仕掛けられるかが重要。企業は、実利のあるインセンティブ、やらねばならないという危機感が生まれなければ自分事にはならない。企業の認定などは、響かない層に対してどうやって仕掛けられるか。

【玉井委員】

- アクション7-15(2)教員の養成・確保の推進について。教員のなり手不足に対する取組みの記載を充実させるべき。
- 山形大学、東北文教大学、東北公益文科大学をはじめ、県内の様々な大学で教員免許が取れる。教員を山形で育てる、メイドイン山形のような記載をしてはどうか。
- アクション7-15(3)教員研修の充実について。教員の主体的な学びの促進はおそらくリスキリングだと思うが、計画案の段階になった際にはリスキリングという用語をもっと使ってみてよいのでは。
- アクション2-3(3)海外体験学習の推進について。秋田大学の学生を海外に引率した際、物怖じせずに現地の方と交流し、コミュニケーションを取ろうとする学生の姿に感心した。今回、海外体験学習をより充実していくことが骨太に書いてあると感じる。

【寺脇委員】

- 概要版2枚目の中で、前回の検討委員会で提案した、子ども、家庭・地域の大人というそれぞれのプレイヤー、アクターがどのように4つのチャレンジに向かっていくのかを具体的に表現しまとめてもらったことを嬉しく思う。
- アクション6の教育DXについて。DX（デジタルトランスフォーメーション）は、ビジネスでは、デジタル技術を活用して、業務プロセスの改善のみならず、ビジネスモデルを変革して企業文化・風土を改善し、競争上の優位性を確立するところまでやる。デジタルライゼーションと曲解されることがあるが、DXという言葉を使うならば、新たな価値創造のフェーズまで視野に入れることが重要。今回の素案は、表層的な部分に文章や施策がまとまり、内容を深めきれていない印象。
- 校務DXの視点が抜けていないか。校務DXによる校務プロセスの改善やスピード化によって、教員に余剰時間が生まれ、指導の質の向上につながる。教員のデジタル活用の資質向上のための研修だけではなく、校務DXによって価値を生み、学校ごとに競争上の優位性を確立するという内容を入れてはどうか。これはまだどこの自治体も述べていないので、山形県としての優位性を発揮できる内容にもなる。
- 校務DXを進めると、教員、生徒だけでなく、保護者のリテラシー育成の課題が発生する。今回の計画は、子ども、家庭・地域の大人、それぞれにメッセージを発信しているのだから、教育DXについても保護者というアクターに対してどのような提案していくか考えてはどうか。
- 佐藤委員から、指標に関して不登校児童生徒の高校進学率や数年後の状態を追いかけてはどうかという発言があったが、これは教育DXにもつながる。世界には、緩やかな管理体制で子どもたちの学力を全て記録し、その結果どのような教育を進めれば最もうまくいくかという教育データの蓄積に成功している国がある。DXによって入学、在学、退学、卒業までの一貫通貫した分析が可能になり、分析することで教育の競争上の優位性の追求が可能となる。入学、在学、退学、卒業までの一貫通貫したデータの蓄積と分析という新たな内容を入れると、教育DXとしてより厚みが出るだろう。

【内藤委員】

- 素案本体の進行管理に、毎年度、点検及び評価を行い、評価の結果を公表するとあるが、計画素案は全体的に大まかな記載が多いので、現場レベルに落としたときの想像がつかない。評価結果の公表の仕方をどうするのか、どこまで公表するのか。
- アクション8-19(1)の1点目に記載がある情報共有サイトについて、今後新たに作るのか。情報サイトや情報発信という記載があるが、情報サイトで公開・発信して十分と思っていないか。ウェブページの役割は昔と変わっていて、今は、認知でウェブサイトの位置づけはあまりない。ウェブサイト・情報サイトは、興味関心を持ってから見るもの。作ったら見るだろうというのは大

間違いで、載せるだけでは多くの人は見ない。

- 様々なツールを使って情報発信するものと思うが、その内容や発信ツールの選択、発信主体や期間などをどう考えているのか。SNSや子どもたちが大好きな YouTube の2つが世の中の大きなトレンドの上位に来ているのに、ほとんど記載がないのは大丈夫か。
- 情報発信の方法を変えていかないと、現場レベルになったときに絵に書いた餅になるのではないか。計画を策定した後、実際に実行する人たちがどのように運用・運営をしていくかが非常に重要な部分で大きな問題。

【中西委員】

- 骨子や素案は、網羅的に内容が盛り込まれているので、この内容全てを学校・教員が実施することは大変。これから施策・指標を考えていく中で、出来る範囲で取り組むもの、全ての学校で取り組むものなど、基準を明確にした方がいいのではないか。
- 今後、7教振に熱心に取り組む学校がある一方で、取り組んでいることも認知していない学校も出てくるだろう。教育の現場で内容の振り返り、確認ができるように教員への示し方を考えてもらいたい。
- 地域の大人にも計画を伝える必要があり、あらゆる場所で内容が目につくような仕掛けがあると、県内一丸で取り組む形ができるのではないか。
- 弊社には、近隣の小中学校から会社見学に来るが、子どもたちよりも先生の方が興味深々である。大人・教員も、教えるだけでなく、一緒に体験し、成長できるような計画になるとよい。

【藤川委員】

- 島根県隠岐諸島の島前地域では、廃校寸前の高校をV字回復させた隠岐島前教育魅力化構想を作っている。物語調で、構想の方向性、課題が個人・子どもたちの言葉で書かれており、読みたいと思わせる内容になっている。
- 同地域では、市町村、学校、地域の考えやオリジナリティを言葉に表すことができるワークシートを盛り込んだ副読本を作っている。山形でも同様のものをまとめることはできないか。
- また、副読本の最後に、施策に取り組まなければ島がなくなるという未来が描かれている。7教振でも、将来について危機感を抱かせる内容があってもいい。

【三浦委員長】

- 教員の年齢構成が大きく変わり、初任の教員が増える時代の学校をどう考えるべきか。山大、芸工大、公益大、文教大で教員養成をしているが、山形の教員をどう育てるか、この10年は大きく問われる。
- 若手教員が増える一方で、年配のベテラン教員はこれまでにないほど減り、教員を学校の中だけで育ててきた文化の維持は難しくなる。7教振の議論を

踏まえると、教育委員会の枠の中だけでなく、様々な人の力を借りながら教員が育つ時代になっているということ。その軸を明確に示してもらいたい。

- 各課それぞれが事業を推進していることはわかる。6教振のキーワードは「つなぐ」だったが、各課がその枠を超えてつながることはまだ十分とは言えないのでは。トランスフォーメーションの議論を大事にして、その枠をいかに超えていけるか。今までの考え方から一步はみ出るような7教振にしてもらいたい。

【村山委員】

- 目標の「ウェルビーイングを目指す」については、前向きにチャレンジできない現状があるからこのような文言が出てくるということ。チャレンジできない理由に、3つの間（3間：子どもの自由な遊びの「時間」、のびのび過ごせる「空間」、ごちゃ混ぜの「仲間」）が無くなったことがある。今は、いつも子どもの周りに大人がいて、怪我や喧嘩、トラブルが起きないように監視し、好奇心の芽を摘んでしまっていて、子どもたちが無気力になっている。この点を課題と捉えておかなければならない。
- 計画を伝えるためには、もっと言語化・可視化する必要がある。県民の皆様へのメッセージ内の保護者の部分に、「子どもの学びや社会性を育む原点」とあるが、「学び」と言われると家庭はプレッシャーを感じるだろう。今の子どもたちは、学びのために、幼少期から塾や習い事をしていて、何もしない放課後がない。家庭では学びよりも豊かな育ちが大切であり、その土台の上に学びがあるべき。「学び」から「育ち」に言葉を変えてはどうか。
- 地域の方へのメッセージとして、子どもの健康や成長を見守るだけでなく、子育て家庭や保護者を支えてくださいというメッセージがもう少し強くあってもいい。
- アクション7-15（1）働き方改革の推進について。教員自身が豊かな人生を送ることで心に余裕と余白が生まれ、子どもたちの身近なモデルになる。学校の指導体制・環境の充実については、ハード面よりこうしたソフト面を前面に出すとよい。

【矢野委員】

- 教職員のウェルビーイングこそやるべきこと。もう少し強調してはどうか。
- 生成A Iによって、今後5年、10年で世の中がゼロから変わるという前提で考えるべき。10年後に学校があるかは正直疑問。学校の存在や意味、教育の意味やイメージが変わる。そうしたことを踏まえると、DXの捉え方、認識がまだ足りない。足元としてクラウド化やネットワークを整備することは当然の話。
- 生成A Iを今ある仕組みにトッピングしてどこに使ったら便利か、役に立つかという検討ばかりしては駄目。今ある仕組みは、学校も先生も全て生成

AIがないことが前提の仕組み。我々に必要なのは、最初から生成AIがあったら今の仕組みは意味があるのか、あるいは、生成AIがあることを前提にするとどういう仕組みにすべきであるかという問い。7教振では、生成AIがあることを前提に、教育、学校、先生がどうあるべきか、どう作り直すべきかを研究してもらいたい。

- 探究型学習では、生成AIを使うか使わないかでやれることが一変する。今までは経験を積んで視野を広げないとわからなかったりできなかったことが、若い人でも、生成AIを使うことでどんどんその力を発揮できるようになった。子どもならなおさら。
- AIの時代だからこそ、人間は、課題・問いを創る力や腹を決めて前に進む力、つまり人間力が求められる。教育現場で、もっともっと重点的に問いを作って、腹を決めて前に自分で行動する、人に協力を求めるといった能力を育成してほしい。7教振のキーワードである、チャレンジ・挑戦こそ、人間力が問われるもの。逆に言うとそれ以外は、ほとんどAIがしてくれるということ。

【小関教育委員】

- 県民の皆様へのメッセージがあるが、YouTubeチャンネルを開設して発信してはどうか。長井市の公式YouTubeチャンネルは、市長自らが政策を説明していて視聴数が伸びている。動画配信を侮ってはいけない。
- 生成AIで動画を作成するのもよい。そうすることで生成AIを身近に感じられるだろう。

【丹治教育委員】

- どのチャレンジも、体験・経験から始まって、その体験・経験によって学びの深さが違うものになる。
- 地域の大人が鍵。地域・社会で子どもを育てるという言葉をよく聞くが、地域の人達はそう思っているだろうか。
- 良いところだけではなく、できない・進まない理由もみんなで共有することが必要。
- 子どもたちを育てるというよりも、地域の大人や親が子どもたちと一緒に育つということ。子どもには、失敗を恐れずにチャレンジしようと言う一方で、大人自身は先々を見通して失敗しないようにしてしまう。大人も、子どもと一緒に、失敗も含めて経験していくことが大事。
- 子ども、家庭、地域が別々になってしまわないよう、ハブとなってそれぞれをつなぎ、コーディネートする役割の人が必要。子どもでも、保護者でも、地域の大人でも、誰がなってもいい。
- たくさんのチャレンジがあっても大変だが、今変わらなければならない時が来ているということ。すぐに結果は出ないので、だからこそ指標、評価が必

要であり、今どこにいるのか、向かう方向性は間違いないかを確認しながら、覚悟を持ってやっていかなければならない。ただし、やることがたくさんあると、手段が目的になりがちなので、その点は気を付けるべき。

【手塚教育委員】

- 施策を具体的にどう実現するかは、K P I の設定が重要。一般的にK P I の設定は抽象的になりがちなので、具体的で客観的に計測可能なK P I を設定すべき。